

## 明恵上人樹上坐禅像における型と制作背景

伊藤 久美 (東北大学)

京都・高山寺所蔵の国宝「明恵上人樹上坐禅像」は、華嚴宗中興の祖、明恵上人高弁(1173~1232)を描いた掛幅画である。高山寺の裏山、楞伽山の中で松の上に坐禅する明恵をあらわす。緻密な写貌表現が、在りし日の上人を彷彿とさせる。近年、議論的となっているのは、この図様の型を羅漢図に求め、主題もまた明恵を羅漢に擬すことにあるとする説の是非である。本発表ではこのような研究動向を踏まえ、以下に示す二つの新知見をもとに、本作の型と主題をめぐる問題を考察し、その制作背景に試論を呈したい。

第一に、十六羅漢信仰で知られる明恵が、殊に第五尊者諾矩羅(ナクラ)を思慕していたという側面と、この十六羅漢中の諾矩羅の図像に、本作と共通性を有する作例が複数見出されることを指摘する。すなわち、報恩院本『高山寺明恵上人行状(漢文行状)』所収の「御消息三通」には、明恵が諾矩羅宛に手紙をしたためたり、宰相阿闍梨なる人物から諾矩羅の御影を借り受けようとする様子が記されるが、和歌山・浄教寺や大阪・法道寺には本作同様、向かって左を向き、瞑目して禅定する諾矩羅像が現存する。『高山寺縁起』等によれば、十三世紀初め、高山寺が数組の十六羅漢図を蔵していたという。その中に存在した禅定形系統の諾矩羅像が、坐禅する像容の範とみなされ、本作の型として取り入れられたのではないかと考える。本作が、向かって右を向く明恵を描いた他の主要な上人像群と異なり、<欠けた右耳>の上人像ではない理由もここにあると考えられる。

だが一方で、広く描かれる山林など、全体はむしろ羅漢図に擬すことにこだわりを感じさせない。型の使用は部分的なもので、主題は別にあると察せられる。そしてその内実を知る手がかりは、画面上部に付された明恵自筆と伝わる賛にあると考える。

そこで第二に、この賛が明恵自筆の可能性が高いことを再確認する。先行研究では明恵自筆とするのに否定的な傾向がみられるが、他の文書類の筆跡と改めて比較すると、賛には明恵特有の書き癖が看取される。とすれば、文言を明恵の思想に依拠してより厳密に読み解き、その意味を画像に反映させながら主題を再考すべきであると考え。ここで賛中の「擬凡僧坐禅之影。写愚形。安禅堂壁」という文言に注目したい。既に指摘されるように、自著『三時三宝礼釈』の中で、明恵は「凡僧」を「住持の僧宝」という、正信正見をそなえた現実に存在する僧として説明する。それは、羅漢とは別の位置づけであるだろう。つまり、本作は、実際の山中を舞台に、あるべき僧の姿を描き出すものであったと考えられる。元仁元年(1224)冬、明恵は楞伽山に蟄居し、一向に坐禅した。その間、多くの瑞夢を得たという。そうした中で、自己を「凡僧」像として絵に留め、禅堂に安置して弟子らに示そうと構想し、自身が思慕する諾矩羅の図様を借用して制作したものが本作なのではないかという試論を提示したい。